



Special Report

追悼・坂本龍一

クラシックから最先端のテクノ、そして社会運動——
ジャンルを超え、時代を駆け抜けた「教授」の生涯

追悼	マエストロ坂本は私のヒーローだった	18
足跡	音楽の「未来」を坂本龍一は体現していた	20
■人生	芸術と共に生きた「教授」の71年	22
インタビュー	「YMO第4の男」が見た才能の正体	24
寄稿	「教授、また会う日まで」大江千里	26
秘話	天才・坂本龍一と40年間走り続けて	28
再録	教授が遺した名言を聞け	30

COVER: Lisa Kato.

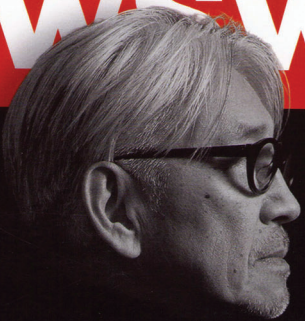
Periscope	
JAPAN	台湾有事で中国は沖縄を揺さぶるが…………… 12
RUSSIA	反プーチン派「カフェ爆破」犯行声明の真偽…………… 13
UNITED STATES	ウイスコンシンからバイデンに追い風が吹く
CHINA	「習近平」が抜け落ちた人民日報の大誤植
Commentary	
歴史	中世の歴史が物語る中国の先行き——河東哲夫…………… 14
米政治	トランプ「勝利」の先に待つ破滅——グレン・カール…………… 15
中東	イラン・サウジが蜜月とは限らない——飯山 陽…………… 16
Superpower Satire	風刺画で読み解く「超大国」の現実
馬英九の中国夢は台湾人と無関係——ラージャオ・トゥガラシ…………… 17	
Economics Explainer	経済ニュース超解説
物価対策の給付金は「不公平」か——加谷達一…………… 38	
Help Wanted	人生相談からアメリカが見える
12歳の姪っ子を泣かせてしまった私…………… 39	
Just a Joke	たかがジョーク、されどジョーク
選挙の季節に「旬な」果物を——早坂 隆…………… 40	
World Affairs	
米司法	トランプ起訴状の前途多難な戦い…………… 32
ロシア	ファシズム国家の冷酷さを直視せよ…………… 35
中国	権力集中に走る習近平の野心と不安…………… 36
Features	
ビジネス	アメリカ起業ブームの新たな主役たち…………… 42
Life/Style	
Music	TWICEの第2章が始まった…………… 48
Movies	犯罪ノンフィクションという醜悪な世界…………… 52
Drinks	大地が育むワインのサステナブルな味わい方…………… 55
My Turn	犯していない殺人罪で38年も服役させられた…………… 59
Departments	
Perspectives…………… 5	In Focus…………… 8
Picture Power	カンボジア鉄道の数奇すぎる運命…………… 62
News English & Letters…………… 68	
Tokyo Eye	外国人リレーコラム——西村カリン
日本人が死刑の意味を考える時…………… 70	

坂本龍一の音楽は永遠に

ニュースウィーク日本版

定価480円

Newsweek



Ryuichi Sakamoto
1952-2023

Ars longa, vita brevis.
芸術は長く、人生は短し



2023
4.18

雑誌25253-4/18ニュースウィーク日本版 2023年4月18日号 (第38巻15号、通巻136号) ©Newsweek LLC 2023. ©CCC Media House Co., Ltd. 2023
無断転載・複製を禁じます。編集部へのお問い合わせは〒141-8205 東京都品川区上大崎3-1-1 株式会社CCCメディアハウス TEL: 03-5436-5750 FAX: 03-5496-7561
NEWSWEEK JAPAN (ISSN 0912-2001) is published weekly except for three combined issues per year mailed in April, August and December, respectively. Annual subscription rate is US\$300.
Second Class postage paid at New York, N.Y. and at additional mailing offices.

Special Report

OBITUARY

信念の人
環境問題や平和運動など社
会的な発言も積極的に続け
た(2014年5月、ニューヨー
クのイベントで)

A TRUE HERO

マエストロ坂本は 私のヒーローだった

追悼

寛大さと思いやりに満ち
有言実行を貫く本物の市民
偉大な芸術家の喪失を
世界が感じている

アンドリュー・レビタス
(『MINAMATA—ミナマター』監督)

坂

本龍一は、私がアー
ティストになってから
ずっとヒーローだった。
彼の創作活動の優雅な
輝きだけが理由ではない。自分が最
も信じる人々や理想を情熱的に支援
するために、時間とエネルギーを使
うことを彼が選択してきたからだ。

有名人も政治家もソーシャルメ
ディアに投稿する市民も、世間体のた
めに道徳的な振る舞いをするこの世
界で、口先だけでなく本当に実行す
る人はごく限られていることを、私
は痛感している。「マエストロ」こ
そ本物の市民であり、彼は信念を持
って有言実行を貫いた。

映画『MINAMATA—ミナマ
ター』の編集初期のファーストカッ
トが仕上がると、私はニューヨーク

で龍一に見てもらう機会をつくった。
プロジェクトを立ち上げたときか
ら、物語のニュアンスやそこに住む
人々について、この映画が地元や世
界に与える影響について、この映画
が変えることのできる政策について、
深く理解して責任を果たすことがで
きる作曲家は坂本氏しかない、と、
私は心から信じていた。過去(と現
在)の患者と被害者(と彼らの家
族)に敬意を表し、水俣の物語を全
く知らなかった人々にも感動を与え、
行動を起こさせるような形で、心の
奥底まで手を伸ばして揺さぶること

ができる作曲家が必要だった。
彼ほど偉大なアーティストに依頼
する予算はなかったが、彼に映像を
見ってもらうまで作曲家は決めないこ
とにした。同じ精神を分かち合い、
作品の価値を理解してくれることを
願って……。そしてあの日、私はニ
ューヨークのコーヒーショップで彼
の反応を待ちわびていた。
窓の外を眺めていると、優雅な着
こなしの龍一が通りを渡って店に入

ってきた。そのまま私に歩み寄り、
何のてらいもなく私を抱き締めて、
この映画を作っていることに静かに
感謝を伝えてくれた。私は安堵と感
謝と喜びで涙が込み上げ、その瞬間、
パートナーを得たと確信した。
影響力のある芸術がもたらす研ぎ
澄まされた切れ味をマエストロほど
理解していた人はいない。龍一は映
画を見ながら音楽が聴こえてきたと
言って、後に『MINAMATA』

のテーマ曲となる最初の数小節を思
慮深く口ずさんだ。私は芸術同士の
共鳴と天才的創意の素晴らしい瞬間
を目の当たりにしていた。その後の
寛大さと思いやりに満ちた彼とのや
りとりを、私は生涯心に刻んでいく。
坂本龍一の喪失を、世界の芸術界
全体だけでなく、彼が応援した世界
中の人々が感じている。しかし、い
つまでも残る彼の最高の遺産は、彼
の作品に出会い刺激を受けた大勢の
人々が立ち上がり、彼のように自分
の才能と情熱を良い方向に使ってい
くことだと、私は信じている。 **N**

日

本を代表する作曲家で、映画『ラストエンペラー』（1987年）や『シエルタリング・スカイ』（90年）、『レヴェナント 蘇えりし者』（2015年）などの音楽を担当した坂本龍一が3月28日に死去した。71歳だった。本人のインスタグラムでは死因などを明かしていないが、ステージ4の癌と診断さ

れ、長く苦しい闘病生活を送っていたことは知られている。

未来的なテクノポップから古典的なオーケストラ曲、ビデオゲーム用の楽曲から繊細なピアノソロまで、坂本は自在にこなした。彼の音楽はキャッチーで感情を揺さぶる一方、身の回りにある自然な音も巧みに取り入れていた。数々のソロアルバムを発表する一方、ジャンルを超えて

多彩な音楽家とコラボし、その楽曲によりアカデミー賞とBAFTA（英映画・テレビ芸術アカデミー）賞、グラミー賞、ゴールデングローブ賞（2度）を受賞している。

1978年にはイエロー・マジック・オーケストラ（YMO）の結成に参加し、シンセサイザーやシーケンサーを駆使して「コンピュター・ゲーム」などのキャッチーなヒット曲を生み出し、日本音楽に対する西洋人の固定観念を覆した。

「好奇心。それが彼のテーマだ」。長らく坂本とコラボしてきたカールステン・ニコライは2021年の電話インタビューで、そう語っている。「龍一はすごく早い時期から気付いていた。音楽の未来は必ずしも特定のジャンルにあるのではなく、異なるスタイル、普通じゃないスタイル間の対話にあるのではないかと」

坂本の名が世界に知られるようになったのは、大島渚監督の映画『戦場のメリークリスマス』（83年）でデヴィッド・ボウイと共演してからだ。大島監督は演技経験のない坂本に出演を依頼し、坂本は映画の音楽を担当することを条件に監督の依頼に応じたのだった。

シンセサイザーを駆使した『戦場のメリークリスマス』のテーマは坂本の代表曲の1つとなった。歌手デビッド・シルビアンはこの曲に詞を付け、「禁じられ

COMPOSER FOR THE AGES

音楽の「未来」を坂本龍一は体現していた

足跡 クラシックから最先端のテクノまで
軽やかにジャンルの間を行きつ戻りつ
心の奥底に届く深遠な音楽を紡いだ男の生涯

た色彩」のタイトルで切々と歌い上げた。ピアノやオーケストラ用にアレンジしたバージョンもある。

この成功を機に、坂本はベルナルド・ベルトルッチ監督の「東洋3部作」と呼ばれる『ラストエンペラー』、『シエルタリング・スカイ』、『リトル・ブッダ』の音楽を手がけることになった。ベルトルッチ監督は坂本に「もっと気持ちを込めてくれ！」と叫び続け、オーケストラの録音中に曲の修正を求めることもあったが、ともあれ完成した『ラスト

エンペラー』の音楽で、坂本は日本人として初めてアカデミー作曲賞を手にするようになった。

その後、90年代後半の坂本はクラシックの原点に立ち返った。ドビュッシーを思わせる感傷的で繊細な曲想に加え、現代音楽の巨匠ジョン・ケージに倣ってピアノの奥底まで探るような実験的アルバム『BTTB（バック・トゥ・ザ・ベーシック）』を発表。これに収められた「エナジー・フロア」はビタミン剤のCM曲で、日本経済の「失われた10年」に

生きる人々の心を癒やし、99年にオリコンの週間シングルチャートで1位になった。

心に響く音楽を深化させた

11年3月に福島第一原発の事故が起きてからは、原発運動に積極的に加わった。翌年には再結成したYMOも参加するコンサート「NOUNUKES」を開催。コンサート前日には首相官邸前で原発発集会に参加し、「市民としてここに来た」と語り、みんなが自分にできること

をやり、声を上げることが大事だと呼びかけた。

坂本は14年に中咽頭癌と診断され、いったん仕事を中断した。しかし苦悩を抱えつつ生きる男を描いた映画『レヴェナント』の仕事は断れずに楽曲を提供。結果としてレオナルド・ディカプリオにアカデミー主演男優賞をもたらした。

17年には8年ぶりのソロアルバム『async』（非同期）を発表。そこには映画『シエルタリング・スカイ』の原作者ポール・ボウルズが、

人の死に触れた原作の一節を読み上げる音声も収められた。

この頃から坂本の楽曲は空間を重んじ、時の流れに寄り添うようになっていった。あるインタビューでは、自分の昔の曲を以前よりゆっくりと弾く理由を、こう説明していた。「音符を減らし、(次の音符までの)空間を増やしたい。空間は、無音ではない。空間には音が響いている。その響きを、私は楽しみたい」

貫き通した音へのこだわり

坂本は1952年1月17日に東京で生まれた。父・坂本一亀は著名な文芸編集者で、母・敬子は婦人用帽子のデザイナーだった。

6歳でピアノを習い始め、作曲も始めた。初期にはバッハやドビュッシーに傾倒。10代後半でモダンジャズに出会い、学生反乱の時代を生きた(まだ高校生だったが、学校のバリケード封鎖に加わった)。

その後は現代音楽、とりわけジョン・ケージの前衛的な作品に引かれた。東京芸術大学で作曲と民族音楽学を学ぶ一方、シンセサイザーを巧みに操って日本のポップスシーンで活躍し始めた。

78年には初のソロアルバム『千のナイフ』を発表。電子楽器ポコダーを使った毛沢東の詩の朗読から始まり、レゲエのビートとハービー・

ハンコック風の即興演奏が続く奇抜な作品だった。同年、ベーシストの細野晴臣に誘われ、ドラマーの高橋幸宏と3人でYMOを結成した(高橋は今年1月に死去)。爆発的な人気を博したが83年に解散。ただし、その後も何度か再結成している。

坂本は80年にソロアルバム『B-2 ユニット』を発表。収録曲の「ライオット・イン・ラゴス」ではアフリカンなビートとハイテク感を融合させた。



4 「戦メリ」記者発表で会見する坂本、大島渚、ビートたけし(左から、1982年)

れるなと教えてくれた」とニコライは言う。「メロディーには実験的な可能性があるとということも」

環境問題への意識も高く、09年の『アウト・オブ・ノイズ』には水河の解ける音を収録。17年の『asynchronous』には11年の東日本大震災で水没し、調子の狂ったピアノで演奏した曲も収めた。

最後のアルバムとなった今年1月

の『12』には、闘病のかたわら日記風につづった「スケッチ」のような楽曲を集めた。「ただ音のシャワーを浴びたくて」と、坂本は語っている。そうすれば「痛んだ体と心を少しでも癒やせる気がした」と。昨年末には東京のNHK509スタジオで数々の名曲をピアノで自ら演奏し、コンサート風に仕立てた映像を世界に配信。これが「遺言」となった。

芸術と共に生きた「教授」の71年

クラシックが根幹にありながら、ポップカルチャーの旗手として時代を駆け抜け、映画音楽の成功で世界的に知られた坂本龍一は、社会運動への参加もいとわない音楽家だった

1952年 東京都に河出書房編集者・坂本一亀とその妻・敬子の長男として生まれる

1970年 東京芸術大学入学
1976年 同大学院修了

1978年 「千のナイフ」でソロデビュー(写真1)
細野晴臣、高橋幸宏と「イエロー・マジック・オーケストラ(YMO)」結成。デビューアルバム「イエロー・マジック・オーケストラ」をリリース

1979年 YMOのアルバム『ソリッドステイト・サヴァイヴァー』が爆発的人気に(写真2)

1982年 忌野清志郎とシングル「いけ・ないルー・ジュマジック」をリリース(写真3)

1983年 大島渚監督『戦場のメリークリスマス』に出演、音楽も担当(写真4)
YMOが「散開」

1987年 映画『ラストエンペラー』の音楽を担当。アカデミー作曲賞とグラミー賞を受賞

1992年 バルセロナ夏季五輪開会式の音楽を担当

1999年 「エナジー・フロア」を収録したマキシシングルがミリオンセラーに
初のオペラ「LIFE」を上演

2009年 5年ぶりのアルバム『アウト・オブ・ノイズ』を発表
フランス政府が芸術文化勲章を授与

2012年 福島第一原発事故を受けた脱原発デモに参加(写真5)

2014年 中咽頭癌であることを公表

2017年 アルバム『asynchronous』リリース

2021年 直腸癌を公表

2023年 アルバム『12』リリース、3月28日に死去

ベルトルッチの東洋3部作を手がけた後、坂本の活躍の場は広がっていった。マドンナのミュージックビデオに出演し、Gapのモデルを務め、92年のバルセロナ五輪では開会式の音楽を担当した。87年のアルバム『ネオ・ジオ』と89年の『ビューティ』ではイギー・ポップやユッスー・ンドゥール、ブライアン・ウィルソンらと共演している。

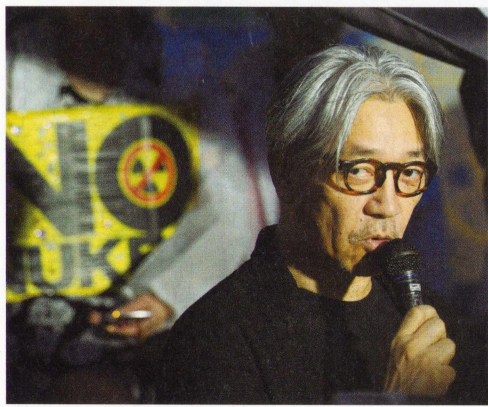
だが90年代半ばには原点であるクラシック音楽に立ち戻り、初期の作品をピアノトリオ用にアレンジしてツアーに出る一方、悲しみと救いをテーマにした交響曲『デイスコード』や20世紀の歴史を振り返るオペラ『LIFE』などの壮大な作品を発表し続けた。

21世紀に入ると、カールステン・ニコライやクリスチャン・フェネスを含む新世代のコラボレーターに触発され、再び実験的な作品に取り組んだ。「彼は私に、メロディーを恐



坂本は学生時代の72年に結婚して約10年後に離婚。82年にはミュージシャンの矢野顕子と再婚したが、こちらも06年に離婚した。最後のパートナーはマネージャーでもある空里香だった。

坂本は日々の暮らしでも音にこだわった。18年のニューヨーク・タイムズとのインタビューでは、長年ひ



いきにしてきたマンハッタンのレストラン「嘉日」のシェフにメロで、「あなたの料理は大好きで、店も好きだが、BGMは気に入らない」と伝えたというエピソードを明かしている。その後、彼は店で流すべき曲のリストを送ったそうだ。美食には妙なる音楽。それだけが坂本の望みだった。

A GROOVE MASTER PASSES AWAY

「YMO第4の男」が見た才能の正体



「以心電信」
機械と人が生み出すグループ
で世界が揺れた。写真中央奥
が松武(1980年10月、ロンド
ンでのYMOのライブ)

電子音楽の大家、富田勲に師事して音作りを学び、坂本龍一の初のソロアルバム『千のナイフ』(1978年)やYMOの作品制作・ツアーに参加したシンセサイザープログラマー・作編曲家の松武秀樹。「第4のYMOメンバー」と呼ばれる松武に、坂本との交流について本誌・澤田知洋が聞いた。

坂本さんとの初対面は？

インタビュー

YMO以前から親交のある 松武秀樹が語った 伝説的バンドの音作りと 若き坂本龍一の テクノロジーへの洞察

本格的に一緒に仕事を始めたのは『千のナイフ』だけど、初めて会ったのはその2〜3年前。坂本さんはスタジオミュージシャンとして歌手りりいさんのキーボードリストをやっている、りりいさんのコンサートオープニングの鐘の音をシンセサイザーで作ってくれという依頼が僕にあった。坂本さんはボソボソと話す長髪でサンダル履きの人、という

印象だった。
坂本さんもシンセサイザーでの音作りの原理は知っていたから、ある程度は僕が作ってその後、坂本さんが微調整して自分が望む音を作っていた形。後のYMO時代の仕事もそのような流れだった。

——『千のナイフ』へ参加の経緯は？

当時ローランド製の自動演奏機MC-18を国内で持っていたのは僕と富田先生ともう1人ぐらい。誰にでもご提供しますよ、というのが僕だった。『千のナイフ』にシンセサイザーのモーグIII-CとMC-18で参加してくれという話だったと思う。坂本さんはゼロから作品を構成して最終形に持っていく能力がすごかった。音楽のジャンルを問わず情報を収集して対応できる人で、それはキャリアの最初からそうだった。

——『千のナイフ』の録音ではどの曲も全体像はなかなか言葉で説明されず、メロディー抜きのコード進行や構成の説明だけがある状態。だからその場で坂本さんの頭の中にある設計図どおりに順番に録っていくという作り方になる。音符に書けないサウンドエフェクトのような音については言葉と絵での説明があった。坂本さんは絵がすごくうまいんです。

例えば「UFOが飛んで、上空で旋回してまた地上へ下りてくる」みたいな感じの音が鳴るといいねと言

FIN COSTELLO—REDFERNS, GETTY IMAGES

って、紙に描いてくれる。言葉で言うのは簡単だけど、坂本さんが頭の中で描く音符に書けないものを、2人であでもないこうでもないという時間もかけて作った記憶がある。言葉と音符と、情景の表現。それを音に表すのがうまい方だったなと振り返ってみて思う。

——YMOのレコーディングはどんな様子だったか。

3人ともある程度、譜面で全体像を作ってきた。ただ譜面上にはメロディーはなく、コードとリズムのパターンだけ。リズムもやってみて駄目だったらまたすぐ録り直すという試行錯誤を繰り返していた。

——YMOの海外ツアーで観客はどういう反応だった？

日本のバンドが初めて世界に出てきて、大きい電子楽器で何を演奏するのか。奇妙奇天烈な音でとんでもないことをやらかすのでは？と皆さん驚かれたんじゃないかな。「イエロー・マジック・オーケストラ」という簡単明瞭な言葉で表されているように(サポートメンバーを含めて)6人しかいない東洋のバンドが何十人分の演奏を、コンピュータを介することで見せることが珍しく受け取られたと思う。

何十台ものシンセサイザーをどうやって操って音を出すのかも不思議だったんじゃないかな。普通は自分みたいなシンセサイザーのプログラマーはステージには上がらない。でも細野晴臣さんが松武さんもステージに、と言ったのは人間対機械のステージ上でのせめぎ合いというか、共存共栄をお客さんに見せるバンドコンセプトも関係あったのだと思う。

——坂本さんの言葉で印象に残っていることは。
コンピューターなら何でもすごい、ということだけでなく、コンピューターは人間がある程度の情報を与えないと何もできないので、情報の与え方、要はプログラムの仕方を研究しなきゃいけないとおっしゃっていた。現代なら人工知能(AI)もきちんと情報を与えないと間違ったことをやるように(サポートメンバーを含めて)6人しかいない東洋のバンドが何十人分の演奏を、コンピュータを介することで見せることが珍しく受け取られたと思う。

コンピューターなら何でもすごい、ということだけでなく、コンピューターは人間がある程度の情報を与えないと何もできないので、情報の与え方、要はプログラムの仕方を研究しなきゃいけないとおっしゃっていた。現代なら人工知能(AI)もきちんと情報を与えないと間違ったことをやるように(サポートメンバーを含めて)6人しかいない東洋のバンドが何十人分の演奏を、コンピュータを介することで見せることが珍しく受け取られたと思う。

つちゃうわけで。YMOの3人はそういう思考をはなから持っていた。いい例が、音楽がノックしてくると体が動く「グループ」について。暗黙の了解のうちにバンドメンバーたちがアイコンタクトで「よし行くぜ」と演奏するからグループが生まれる。だけどコンピューターはそういうことはできない。アイコンタクトを数値化して、それをMC-18などに情報として与える。だから、演奏のピークへ向けてグループを盛り上げていく数値の入れ方がある。それを坂本さんが特に研究されていた。僕に坂本さんがここはもう少し数値を手前に、とか後ろに、とか話しながら人力して曲が作られていった。

均等に正確無比に演奏するものもテクノだけど、自分たちなりの感情グループを数値化して、それを入れ込んでいくというのがYMOならではのグループ感を出す方法だった。

——YMO後期は坂本さんと細野さんの仲が悪かった？

勘違いされている部分が多いけど、仲が悪かったわけではない。あんなに売れたくはなかったと3人ともよくおっしゃっていた。もっと自分たちの個性のある音楽を作りたいけど、レコード会社が決めた発売日にアルバムを出さなければいけないジレンマがあった。そこですれ違いが起きたのだと思う。そのジレンマが形に

なり「ライディーン」みたいな曲はもうやらない、とファンを裏切るようなアルバムにしたのが『BGM』とその後の『テクノデリック』だと思っている。YMOのサウンドはテクノデリックで完成されたと思う。

——坂本さんの音楽的功績とは。

「無国籍」な音楽を作った点にあるのでは。もちろん東洋的なペンタトニック(5音階)を使った曲もあるけど、ジャズやフュージョン、土着的なメロディーなんかは坂本さんの頭の中で整理整頓されて、僕らが予測できない展開がされていた。坂本さんの曲のコード進行はすごいと思う。テクノは基本的に簡単明瞭で、例えば使うコードはドミソのような3和音が多い。YMOの曲は3人ともテンションコード(複雑なコード)だらけで、特に坂本さんの曲は発想の出どころが分からなかった。

——最後に坂本さんに会ったのは？

まだ癌罹患を発表する前、東日本大震災後に結成され、坂本さんが音楽監督を務めた東北ユースオーケストラのリハーサルを僕が訪ねたときだったかな。「元気で、ずっといい音楽を作ってね」と声をかけると「ありがとう」と笑っていた。同じ年齢で同学年、同じ時代を生きてきた者としては、もう少し生きていてほしかった。もう一回いろいろ話したかったな、と悔いが残る。

イ

ンスタグラムを開くと、よく知っているアメリカのレコード会社の女性とヨーロッパのミュージシャンが哀悼の意を示していた。投稿には1952年1月17日―2023年3月28日とある。嫌な予感がして僕は画面を閉じた。ずっと心の隅で恐れていた。必死で目をそらすとした。

この日、春の風の強い風が吹くニューヨーク・ブルックリンの屋外へスリッパのまま飛び出ると、少し日が長くなった空に白く丸い月が浮かぶ。目の縁がにわかに熱くなり、鼓動が激しくなる。それは熱を持ったまま膨らんだ。しかし頬を伝わらずギリギリ目の縁にたまったまま。僕は

は空を向き、落ちないように用心深く歩いた。

坂本龍一さんに初めて会ったのは1983年の4月、ちょうど今日のよう日だった。僕のデビューアルバムをプロデュースしてくださったギタリストの大村憲司さんが「YMO」のツアーサポートをされていた縁で、ある日レコーディングスタジオで憲司さんがこう告げた。「アッコちゃん（矢野顕子さん）が俺が渡した千里のカセットを気に入ってくれて、教授にいいよ！って聴かせたら、今度ラジオに来ないかって言ったの。一緒に呼ばれるかもしれないぞ」。僕は教授が参加していた「KYLEYN」というバンドが以前から大好きだったので、「ええ？」と心



TRIBUTE TO MY PROFESSOR

「教授、また会う日まで」

寄稿 ボルボの助手席から3時間のLINE会話まで
同じ街で暮らした大江千里が坂本龍一との思い出をつづった

大江千里（ニューヨーク在住ジャズピアニスト）

臓が飛び出そうだった。

呼んでいただいたラジオ番組はNHK「サウンドストリート」。収録は509スタジオで大きな場所だったが、遮音板が四方に張り巡らされて僕たちがしゃべる空間自体は親密だった。憲司さんはご自身のソロアルバム『外人天国』、僕はデビューアルバム『WAKU WAKU』について話した。

まだデビューする直前の僕に、教授は終始穏やかで優しくあったが印象としてはどこかゴツゴツしていた。飾らない言葉をストリートに放つというか。それからもちろん会う機会はなかったが、それは当然で、憲司さんがいなかったら会えなかったのだから、あれは奇跡だったのだと自分に言い聞かせた。

88年、出会いから5年ほどたったある春の日、ベイビーグランド（小型のグランドピアノ）の足元に置いた電話が鳴った。留守番電話に「もしもし、坂本です。今度薬師丸ひろ子さんに曲を書いたんだけど千里くん、詩を書いてもらいたくて電話しました。返事を下さい」という声が聞こえてきた。慌てて「本当に教授ですか？」と受話器を取ると「そうだよ」とあのときと同じ飾らない声が。それから僕は、教授が送ってくれたデモを擦り切れるほど聴き「ふたりの宇宙」という詩を書き上げる

と、「いいねこれ。好きだよ。ありがとう」と言ってくれた。

90年代、教授がニューヨークに引っ越されてから僕も『APOLLO』というアルバムのレコーディングでニューヨークに2カ月ほど滞在した。そのとき教授に電話して「会いたいです」と告げたのだ。よく勇気があったなと思うけれど、教授は「いいよ。じゃあ、ホテルへ車で迎えに行つてあげるよ」と滞在先までボルボを運転して来てくれた。

どこか硬くてゴツゴツしているのにオシャレなその車は、ニューヨークのパンクの多い道を何度も跳びはねながらアッパウエストのレストランへ到着した。最初の教授の印象とどこか重なってうれしくなった。

「ここは面白いよ。ほらごらん」教授が指差すより速くミニスカートのエプロン姿、ローラーブレードを履いた女の子がオーダーを取りにやって来た。びっくりしている僕に「くすっ」と笑う教授は、淡々とハンバーガーを頼む。僕も慣れない英語のメニューを必死に追って自分の分のバーガーを頼んだ。

音楽の話や夢中でし続けているとあつという間に夕方になった。「ちよつと歩かない？」と教授が言うので、「いいですね」とセントラルパーク横の道を並んで歩いた。本屋に寄る。そこは雑然としたアートや音

楽系の雑誌が山積み

の店だ。思い思いの雑誌を立ち読みしていて不意にあるものを見つけて教授を呼んだ。「教授が表紙の雑誌が出てますよ、ほら」

「え？ どこどこ？ あ、本当だ」。僕の手元をのぞき込むと「買っちゃおう」って少年のように手に取り、「千里くんも好きなの買ってい

いよ。僕がまとめて扱うからさ」と、ペロッ舌を出した。遠慮しろよと思うけど、僕は1冊「スピン」という音楽雑誌を「ありがとうございます」と言つて、教授に渡した。

スタジオで涙があふれたことも

この日の出来事がきっかけで僕はニューヨークにアパートを借りた。どうしても胸の奥にあるモヤモヤをそのままにして日本へ帰るのが嫌だったのだ。この地に身を置いてチャレンジしたい。英語も音楽も。そして僕の最初のニューヨークのアパート生活が始まった。

ある日、たまたまイーストビレッジ

ピアノがつなく ニューヨークで演奏する坂本（1998年2月）と大江（右ページ、2016年7月）。80年代から縁が続いた



ジを歩いていると1人のグレイヘアの男性がクォーターコインを路上パーキングに入れるところに出くわした。車は見覚えのあるボルボだ。「教授！」。背後から声をかけると一瞬ギクッとしたように振り返り「君は誰？」と言った。「僕ですよ。大江千里です」

すると、「嘘だね。大江千里はそんな髭面じゃないもの。もっと痩せてるし」と怪訝そうだ。「今、こっちにアパートを借りて、日本と行ったり来たりしてるんです。僕ですよ。ほら」と、帽子を取ると「あつ、本当だ」

このとき教授がふと思いついたように「ちようどいいや。今『シエルタリング・スカイ』を完成させたばかりなんだ。千里くん、そこにスタジオがあるのと一緒に来てくれないかな？ 聴く時間はある？」と僕を誘った。「も、も、もちろんです」

ちようど夕方に近い時間帯で、スピーカーとニープの卓の前にチョコンと座り、僕は大量でその音楽を聴かせてもらった。スピーカーの後ろの窓の外の五番街の渋滞が赤く輝く。聴き終わるとスケールの大きな強くて譲れない感情のようなものに揺り動かされて涙がぽとぽと床に落

「教授に見られると恥ずかしい
と思った。教授は知っていたと思う
けれど、何も言わなかった。」

僕は「ありがとうございます。す
ぐにアパートに帰り曲を書きます」
と告げた。エレベーターに乗ってド
アが開まる直前に、ひょっこり教授
が顔をのぞかせて「ありがとうございます」
と隙間から笑った。

薄暮の中を歩く。さっきの音楽に
心が震え涙が止まらなくて、家へ直
行しピアノを弾きまくり歌った。

それから何年も時間が過ぎ、当た
り前のように教授と会えない日々が
あり、再び僕がニューヨークに住む
ようになって、たしか2019年
(だったと思う)のこと。友人に連
れられて「odo」という和食屋の
カウンターで食事していると、教
授がご家族と一緒にお店に入ってこ
られたのだ。

トイレに行つて便座に座って考え
た。ご挨拶しよう。手を洗い鏡で顔
を確認、席に戻る途中に一度通り
過ぎてからまた戻り「おくつろぎの
ところすみません、大江です」と声
をかけた。すると、「そうだよ、ね
逆にこっちから声をかけられなくて
ごめんね」と教授が立ち上がられた。
「ジャズやってるんでしょう？ 食
えないんじゃない？ 大丈夫？」い
きなりのストレートな聞き方で僕も
素直に「でも好きだから。頑張つて

食えるように一生懸命努力してま
す」。そう答えた。「ね、LINEを
交換しよう」「本当ですか」

2人で携帯をくつつけどうしたら
交換できるか右往左往やっていると
隣の息子さんらしき若い男性が「僕
がやってあげますよ」と、QRコー
ドを出して2人を「友達」にしてく
れた。「僕はガンをやったんだよ。
信じられる？」「知ってます。もう
お元気なんですね」「うん、そうさ」
「よかった」そんな会話をした。

教授が命を削って残した音楽

その夜、教授のほうからLINE
を頂いた。本当は僕からしなくては
いけないのにまた遠慮して躊躇して
いたのだ。「35年ぶりくらいかな？」
教授はウサギの絵文字でフランクに
僕をほくしてくる。「シエルタリ
ング・スカイ」のときのことを話す
と「そんなことあったっけ？ 覚え
てないなあ」と言う。「いつニュー
ヨークに来たの？」「子供の頃から
ビバップは好きだったの？」などの
質問を矢継ぎ早に浴びる。僕は初め
て聴いたジャズ、好きなマイルス・
デイビスの曲など二気に話す。
「ビバップはニューヨークへ来てか
らなんだね。比較的古典が好きだ
ね」。こんな風に会話が始まり「マ
イルスの（アルバム）『TuTu』
は嫌い」とか「クラシックの作曲

今年YouTubeで聴いた教授の演奏は
ゴツゴツして優しい音楽だった
ギリギリのエッジにしながら
包み込むような繊細さにあふれていた

ユースを聞いていてまた僕の引ッ込
み思案が再発。「ありがとうございます
ます、ぺこり」という絵文字を送っ
て会話が終わりになっていた。
もっと「音はどうでしたか？ 好
きなジャズの音ですか？ ピアノの
タッチは？」。いろいろ聞きたいこ
とがあったのに聞けなかった。あの
ニューヨークの整備されてないバン
プの多い道をジャンプしながら走っ
たボルボの助手席。あの感覚はゴツ
ゴツしていたけど良かった。
教授、僕は47歳からまたジャズを
始めちゃったのでまだ時間がかかり
ます。おこがましいですが、いつか
教授の背中を追いかけてあの『シェ
ルタリング・スカイ』のような感動
を誰かに与えることができるようコ
ツコツ作ります。

今年頭にYouTubeで鑑賞し
た教授のピアノ演奏は、僕が覚えて
いるゴツゴツして優しい音楽だった。
ギリギリのエッジにしながら包み込
むような繊細さにあふれていた。収
録された場所はNHKのあの509
スタジオだった。

命を削って残した教授の偉大な功
績と音楽の数々を指標にしながら、
進みます。いつか会える時に今度は
もっとフランクに僕も話せるよう
なるために。教授、ありがとうございます。
大江千里

A DRAGON FLYING ABOVE 天才・坂本龍一と 40年間走り続けて

秘話 1978年から「教授」と苦楽を共にした
音楽業界の重鎮に坂本が見せた素顔

近藤雅信 (V4 Inc.社長、ワーナーミュージック元常務取締役)

い出を振り返ってもらった。

*

教授には後に妻となる人を紹介し
てもらったり、食事に行ったり、お
世話になりました。最後のやりとり
は、いま僕がマネジメントしている
ミュージシャン岡村靖幸の音楽がS
NSではやっていると伝えたときで、



「散開」ツアーの打ち上げで(83年、右から2人目が坂本、3人目が近藤)

配る宣材も作りました。よく覚えて
いるのは教授に「近藤、窓際にいる
仕事ができない社員を見て俺は頑張
ろう、と思うのが会社なんだ」と、
なぜか組織論を教わったこと(笑)。
物知りで、分からないことはすぐ
教えてくれて本当に「教授」みたい
な人でした。音でも言葉でも、メッ

セージを分かりやすく伝えるのがと
てもうまい。スタジオの待ち時間に
よく読書をしていて、柄谷行人の本
を抱えていたのを覚えています。

YMO初期はみんなセセッションマ
ンとして多忙な時期。スタジオでレ
コーディングの指示を出しながら、
次の仕事の譜面を録音卓で書いてい
たという逸話も思い出します。

ソロ作で思い出深い曲は
「ライオット・イン・ラゴス」。
過熱するYMO人気のストレ
スから生まれた「アンチYMO」
的な曲だけど、細野さん、
幸宏さんが気に入るYMOの
世界ツアーのオープニング曲
に採用された。ニューヨーク
公演ではこの曲で黒人の人た
ちが踊っていて「ダンスミュー
ジックとして支持されています
！」と記憶に残っています。

YMOは海外で例えば坂本
九さんの「スキヤキ」のよう
にビルボードで1位になった
わけではない。ただ最近、海
外でもYMOの影響を受けたり、サ
ンプリングしたりするミュージシャ
ンが結構出てきていて、放射状に影
響が広がっていると感じます。

その後僕が東芝EMIに移ると、
YMOの再結成を制作部長として発
案して、93年にアルバム『テクノド
ン』を担当しました。ビジネス的に

は成功でしたが、教授は「ちよつと
(作品が)難しかったかな。ピンク
フロイドとかのスタジオアムロック感
を入れてもよかったかも」と言っ
ていた。伝えることに熱心な人だから、
終わった後でも検証する。ミュージ
シャンとして珍しいと思いました。
ワーナーミュージックではピアノ
に立ち返ったアルバム『BTB』、
大ヒット曲「energy flow」などを
出しました。教授は表現者だし、わ
れわれはビジネスサイドの人間。だ
からこのとき、レーベルの設立をめ
ぐって採算の問題などで齟齬もあり
ました。でも教授は次の日に謝ると
もう笑顔になっている。引きずらな
いタイプですよ。

教授にとってピアノは不可分な存
在だったけど、音楽性の核には何が
あったか。いろいろなジャンルを取
り込みつつ、それに引張られず手
繰り寄せる。この自己の強さじゃな
いでしょうか。才能としか言いよう
がないけど、坂本家のDNAもある
のでしょ。教授の祖父も父の「亀
さん」も、漂泊の人生でありつつ確信
を持って生きたように見えますから。
その一亀さんがこう言ったそうで
す。「俺は亀のように、地を這うよ
うに仕事をしてきた。息子には天に
上るような仕事をしてほしいから
『龍一』と名付けた」と。

IN HIS OWN WORDS

教授が遺した名言を聞け

再録 2009年の音楽誌インタビューで語っていた
「救い」としての音楽と韓国音楽の可能性、資本主義の揺らぎ

2009年に5年ぶりとなるソロアルバム『out of noise』を発表するタイミングで、坂本龍一はウェブ音楽誌e-daysの取材に応じた。自らの音楽の成り立ち、社会の中の音楽の役割について答えつつ、韓国音楽のブレイクや金融危機後の資本主義の揺らぎも予見していた。（聞き手は江坂健）

*

——これまでの坂本さんの音楽からは、構造的な印象を持つことが多かったのですが、今回は絵画的というか、感覚的というか……そんな印象を持ちました。今、音楽を作られるに当たって、最も大切にされていることは何ですか？

「響き」ですね。今回は、特にコンセプトもなく……いつもないんですけれど（笑）。2、3年前から自分で取ったメモを振り返ってみると、

響きから何かを作ろうとしていた、しているんですね。響きは街にもいろいろあるじゃないですか。いろいろな好きな響きを追っているという感じですね。だから、構造的に何かを作るといって、建築的なことはあまりやってなくて。

——それは、ここ数年、徐々にそうなられたんですか？

だんだん響き重視になってきたという感じですかね。うーん、そうなんだらうな。建築と音楽がよく比較されるけれど、建築的に音を重ねていつて何かを作る、ということにはあまり興味がなくなってきたかな。今回は生け花だったら刈る、音を抜くようなことを重視してきた。自然にそうなってきたんですけれど。

——音のバランスというか、美を重視されている、ということですか？
まあ、美なのかな……。それとも

う、個人的なものだから、なんとなくいいの。バイクのエンジンのブルルン、という音が好き、という方もいるでしょうし。美と言わなくてもいいのかもしれない、好きな「音」ということですね。響きでもっと簡単に言っちゃうと、自分の聴きたいような音を並べただけなんです。作った、ではなく。

——（アーティストの）高谷史郎さんとのインスタレーション『LIFE』の情景も、今回、思い浮かぶイメージに近いものがあります。

あれもやっぱり大きく影響しているかな。あれも構造的ではないですね。もっと空間的というか、あの時は「庭」と言っていたんですが、2次元的時間の流れで何かが生じていくとか、論理的に何かに移っていくというようなことはほとんど考えないで、空間にどう音を置くか、

ということが面白かったんですね。
——世界には、音楽と共に豊かな生活を送っている人々も多いと思いますが。
まず、いつも羨ましく思うのは、韓国に行った時に、韓国人は本当に音楽的というか、日本人よりもはるかに歌うこととか、音楽で表現することが好きだし上手ですね。いろいろな感情表現がぜんぶ音楽表現に出てきますね。

ストリートに表現するから、世界的に見ると彼らのほうが表現は豊かですよ。だから何も知らないアメリカ人が見たら、あつちのほうに引かれるんじゃないかな。

——沖縄などはどうですか？

沖縄の民謡酒場は、ずいぶんはやっていたな。驚愕するよね。おじいちゃん、おばあちゃんまで何世代も夜中まで踊っているから、びっくりしちゃうよ。その感じはブラジルなんかもそう。ブラジルは、町単位でカーニバルの時にせりを出すじゃないですか。だから、町単位で練習するでっかい体育館みたいな広場があって、歩いているとすごい音がするから、音に引き込まれて入って行ったらものすごいんですよ。練習している音の圧力、エネルギーが。技術というよりも、音の粒が何万個も重なって、ぐわーっと押し寄せてくるそのエネルギーはすごいですね。

——そういうのは「伝統」によるものなんでしょうか。

コミュニティに根差しているんじゃないかな。日常的なことなのかな。彼らにとっては、回覧板回すのと同じようなことなのかもしれないね。あとやつぱり、「音楽が救い」というのはあんまり言いたくないけれど、そういう役割というのは絶対にありますね、音楽は。僕のオペラ『LIFE』の中で、（ドイツの振付師・舞踏家の）ピナ・バウシュが、ロマの人たちのことを語っていて

「辛い時に、泣くんじゃなくて歌え、って、お母さんに言われた」というのがあって。「Sing!」と。今のガザでも歌っているかもしれない。——個人的な経験でも、「音楽」というレベル以前に、音を出すのが身体に響いて心地いい、と感ずることがあります。
悦ぶ、というのは何か快感物質が



音楽とは何か
インスタレーション『LIFE』
も坂本の当時の方向性を
示している(2010年)

出ているんだと思うんだけど。それは、別に概念的に悦んでいるわけじゃなくて、たぶんもっと生物としての、細胞レベルでうれしいということなのかもしれないね。だからさっきの僕の話も、気持ちいい響きを聴いたり、自分で作ったりした時は快感物質のようなもの、脳内麻薬のようなものが出てくるんですよ。

僕の持論でもあります、よいコンサートほど眠たくなりますよ、必ず。だから、寝られないようなコンサートはダメです。

——あと自分たちで音を創るゆとりが持てるといいな、と思うんですが。ただ、ある程度の経済的な余裕がないと、できないでしょう……。

——そのあたりは、社会構造の話に至りますね。

僕はね、今回の金融危機で、株式制度自体の見直しまで突き進む、と思っていたんです。そうなると思っ

て期待していたんだけど、今は対症療法というか、金をつぎ込んで傷口を塞いで延命させようとしていますが、わりと資本主義の根幹が揺らいでいるよね。次の持続的な経済システムに移行するチャンスではある。みんなそこまで行きたいみたいで。今までどおりやりたい……面白い時だよ。

——結局、経済はマクロに頼らざるを得ないところがある……。
個人で解決するには限界がありますよね。

——そこで、「音楽だよ!」と。

開き直り……それはいいと思いますよ。嫌な響きを我慢すればそれは一種の救いなんじゃないかな。それを素直に救いだって喜べない僕らも不幸なのかもしれない。でも、ピナ・バウシュが言う「泣くな、歌え!」っていうのは、やつぱりすごいね。